



デザイナー

# ハドバートル ・アリオンサナーさん



アリオンサナーさんとデザインしたモンゴルの民族衣装・デール

ハドバートル・アリオンサナー モンゴル国ダルハン・オール県ダルハン市出身。モンゴル国立教育大学を卒業後、服飾の道へ進み、工房経営を経て日本の着物と出会う。2019年よりお針子事業「Kimono Upcycle Cloth Ohariko」に携わり、不要になった着物を素材とした民族衣装などの作品を制作。カンボジアの服飾学生などへの指導も行い、世界を舞台に着物の魅力を伝えている。

「日本の着物は自然をヒントにデザインされます。広げてみると、その絵柄から新しいアイデアが生まれるんです」

「着物には捨てるどころがないんですよ」とサナさん。職人たちが反物に戻した着物の生地も帯も余すことなく使い、草花や自然の景色を描いたその魅力を生かす。シミや汚れのある部分も上手く隠して活用し、着物以外の素材も使わない。

「絵柄の意味を調べれば調べるほど、どの着物もより貴重に感じられます」

中でもサナさんの特別なこだわりは、「古いものを、まるで新品のように見せること」。モンゴルの

## 自然美映す 着物の虜に

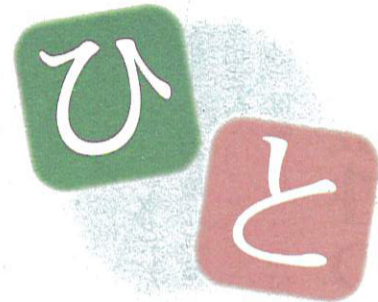
「日本の着物は自然をヒントにデザインされます。広げてみると、その絵柄から新しいアイデアが生まれるんです」

お針子事業(東京都港区の日本リユースシステム株式会社)が運営は、「終活」や「着る機会がない」といった理由で不要になったまだ使える着物や帯を家庭から集め、モンゴ

ル国の現地法人に輸出。サナさんと現地の職人たちが、生地化し反物に戻す。その後モンゴルの民族衣装「デール」をはじめ、ジャケットやバッグ、靴などに生まれ変わらせる。

この事業で同社は、環境省主催「環境人づくり企業大賞2019」で環境大臣賞を受賞した。

7年前からモンゴルで工房を経営していたサナさんは、「着物に出会ってからの5年間、他の素材は使っていません」と話す。旧正月などの節目に民族衣装を着る習慣のあ



キラキラと目を輝かせ、着物の魅力を語るのはモンゴル人デザイナーのサナさん。4月に初来日し、家庭に眠る着物や帯を生地素材として世界で再利用するお針子事業「Kimono Upcycle Cloth Ohariko」のアピールに駆け付けた。

7年前からモンゴルで工房を経営していたサナさんは、「着物に出会ってからの5年間、他の素材は使っていません」と話す。旧正月などの節目に民族衣装を着る習慣のあ

サナさんの原点は、子供の頃に母が服を作ってくれていたことだった。サナさん自身も6年生(日本の小学6年生に相当)の時に服飾の大会に出場したが、良質な生地がなかったため小麦粉の袋で服を縫って出品し、見事優勝。それが自信につながった。

豪華な刺繍の施された特有の和柄とアップサイクル素材であることが、欧米からも注目を集めているという。

お針子事業で作業するモンゴルの職人たちは、障がいを持つ人やシングルマザーが中心だ。事業を通し雇用の機会が創出され、収入の安定や生活水準の向上にもつながっている。

日本リユースシステム株式会社 辻本真子  
電話: 080(7283)5078

メール: atr.mt@nrscorp.jp  
ペンとカメラ・辻本奈緒子